

# 論文審査の結果の要旨

氏名 天野 健作

本論文は、全 6 章から構成され、インドと中国の水資源を巡る紛争及び解決を展望し、紛争を防ぐ実効性のある望ましい国際協調の在り方を考察及び提言することを目的としており、有効な水資源管理及び紛争防止メカニズムの条件を提示した。

第 1 章では、本論文の背景、目的及び理論的支柱が述べられている。世界的な課題である「水資源の危機」について、とりわけアジアに焦点を当てた理由や、国家間のガバナンス及び協力メカニズムの重要性を説いた。本論文は国際政治学上の理論を支柱にした上で、国際法学や水資源学の視点を伴った学際的な融合アプローチを試みていることを明示した。

第 2 章では、インドと中国が共有する国際河川であるブラマプトラ川を事例研究の対象として、両国の対立と協調の実態を解明した。中国がこの河川での開発を公式に認めたのが 2010 年 4 月であり、その研究は発展途上にある。先行研究は、両国の対立を強調し、ブラマプトラ川の水資源争いが単なる外交上の対立から軍事的な対応を引き起こす可能性を示唆する論考が目立った。しかし、本論文は中国やインドの外交記録やその交渉・経緯を分析した上で、協調関係が構築されていることを明らかにした。同時に、その協調には限界があり、限定的な関係であることも指摘した。またブラマプトラ川の開発の実態もこれまで明瞭ではなかったが、中国の実際のダム開発会社からの情報や政府が近年発信してきた情報などで開発の全体像を明らかにした。

第 3 章では、インドの国際河川における合意の履行状況の解明と、同国とその周辺国が構築してきた紛争防止メカニズムを比較考察した。比較の対象は、ブラマプトラ川に加えて、インダス川、ガンジス川、マハカリ川の 3 河川である。先行研究では、それぞれの国際河川において紛争の発生からどのように合意に辿り着いたかなど、歴史的な紛争要因や交渉過程、合意に至った成因に焦点を当てた論考がほとんどであった。しかし、こうしたインドの国際河川を巡る合意がどこまで履行されてきたかについて、本論文は水文データなどを使い実証した。比較分析で得られた知見は、インダス川では特に条約上の目的や義務が着実に履行されている一方で、ガンジス川とマハカリ川では合意内容の進展が見られなかったことである。さらにそれぞれの河川で構築されたメカニズムを比較すると、共通項目として「常設の共同機関」があり、「情報・データ交換」でメカニズムの強化と信頼醸成が図られていることが明らかにされた。

第 4 章では、中国の国際河川における紛争防止メカニズムを比較考察することで中国の水資源政策の要諦が明らかになった。中国は近隣の 17 カ国との間に 40 以上の国際河川を共有し、その大半で上流国として位置付けられているため、中国の国際河川開発や

その政策が、下流に位置する他国の水資源環境に大きく作用してきた。しかしながら中国の国際水資源における政策や周辺国に対する潜在的影響を考察する先行研究はほとんどない。本論文では、中国の紛争防止メカニズムの比較考察を進めたところ、国際河川を巡る紛争防止の要因が明らかになった。すなわち、中国でも当該国と「常設の共同機関」を設置し、「情報・データ交換」を通して、国際水資源の有効な利用・開発を志向していることである。特に北方地域にあるロシアやカザフスタンの間では緊急事態が起きた場合の通報システムも構築して充実したメカニズムがある一方で、ブラマプトラ川やメコン川といった南方地域は異なるメカニズムを構築していることを明らかにした。

第 5 章では、中国がブラマプトラ川の水資源開発に着手したことで、インドの外交政策が転換していることを明らかにした。つまり、南アジア地域でインドはこれまで、相対的に国力が強く「地域覇権的地位」を握っていたが、インドよりも力の強い中国が台頭してきたことにより、水資源政策においてもその覇権が維持できなくなってきたことである。次に、中国のこれまでの「二国間アプローチ」から「多国間アプローチ」へと展開の可能性に言及した。同じ河川を共有しながら、それぞれの国で別々の合意文書を結んでいるが、その合意内容を見ると、互いに相違点は少なく、多国間による統合アプローチが可能であることを指摘した。さらにオバマ政権の「アジア回帰」により、米国が急速にメコン河川流域へと接近し始めたことを分析した。最後に、統合的水資源管理の概念について言及し、メカニズムの発展について地域国際機関の存在を軸に分析している。

第 6 章は、本論文を総括し、水資源紛争を防ぐ実効性のある望ましい国際協調の在り方として、紛争防止メカニズムには「常設の共同機関」の存在と「情報・データ交換」が不可欠であることを実証的に提示することに成功している。

したがって、博士（国際協力学）の学位を授与できると認める。

以上 1,997 字